

私の農業体験記 その1

永井藤樹

平成20年8月26日

農村出身ですが、農家ではありませんでした。小・中学生の頃、農繁期になると農作業を手伝うために、学校が休みになりました。農家出身でない私は、遊び友達もいなくなり、何もすることがないので、教科書を開いて時間を潰していました。敗戦の年、小学一年生になっていた私の家には、子供向けの本はありませんでした。家の手伝いをするでもなく教科書を読んでいる私を見て、同級生から「点取り虫」と陰口をたたかれました。そんなことがあったせいか、いつしか農業に対して憧れを持ったようでした。後に、農家出身の友達にこの話すると「農業なんてものは、憧れてできるものではない」と諭されました。

平成十二年に放送大学に入学し、同時に市民農業大学にも入学しました。停年を一年延長して半年後の四月です。定年後何をしようか考えた末、『晴耕雨読』を方針に立てました。『雨読』の方は早くから放送大学で勉強することに決めていましたが、問題は『晴耕』の方です。農地も農業技術もない私が、どうやって農業に関われるかです。農情報を拾い集め、若くしてサラリーマンを辞め、専業農家に転向された方の体験談やシンポジウムを聞きに行くこともしばしばで、仕事が終わってから両国国技館裏手の安田学園へ聴講に行ったこともあり、なかなか容易でないことを認識しました。しかし、私は農業で生計を立てるつもりではありませんでしたので、こ

れらの体験談はさほど参考にはなりません。こうしてあちこちを巡っている内に、犬も歩けば棒に当たる譬えのように、全国農業協同組合連合会に行けば、農業相談に乗ってくれることを知りました。それは有楽町駅前のそごう百貨店裏のビルにありました。私の夢は、ひとりキャンピングカーを駆って、夏は北海道へ行って農家の手伝いをし、冬は九州や南紀などの暖かい地方で農事に携わることでした。手伝いに行った農家で食べさせてくれさえすれば、それでよいのです。男は五十を過ぎると西行に憧れるといわれます。また芭蕉は「行きかふ年もまた旅人なり。日々旅にして旅を栖（すみか）とす。漂泊の思ひやまず。」と言っているではありませんか。私にもそんな旅心があったのでしょうか。このような考えを全農連の相談員に話したところ「永井さん、あんたなんてバカなことを言うんだ。農民て者は保守的なんだよ。どこの馬の骨ともわからない者を雇うほどお人好しではないよ。」と一喝され、何と浅はかなことにこんなことにも気付かなかったのかと大いに恥じ入りました。しかし、私の熱意は分かってくれたらしく、「それでは横浜の戸塚区役所の中に農政事務所があるから、そこで相談に乗ってもらおうといい」と、教えてくれました。こうしてたどりついたのが「市民農業大学」講座でした。「広報よこはま」二月号の「はま情報」で募集するからそれに応募するといいとアドバイスを受けたのです。

青い鳥はすぐそばにいたのです。これは横浜市緑政局（現在の環境創造局）に所属する「農と緑のふれあいセンター」で行われる講座です。場所は保土ヶ谷区狩場町。英連邦墓地や児童公園と地続きの一角になります。受講生は五十人。後でわかったことですが、この講座に入学するのは大変で、私の時は競争率二・五倍だったそうです。一時は十倍を超える人気の講座でもあったようです。試験があるわけではありませんが、入学の動機の記述を求められます。動機がいかにか真剣で熱意があるかで決まるのではないかと思います。同級生の中には三度目に入れたとか、五年目で実現したと云っていたから、私は本当にラッキーでした。入学金は今では一万円を超していますが、税金もかかっているから遊び半分では困るのです。初年度はセンターで農業に関する基礎座学が主になります。座学の外にトマト、きゅうり、ナスなどの野菜づくり、花の植え込み、梅の木の剪定などの実務もあります。受講生は二十代のお嬢さんもいれば、私より年配の人もいて男女同数です。現在では野菜・果樹コース四十人、花・緑コース三十人の募集だそうです。二年目に入ると、花・野菜・植木・果樹の四コースに分かれ、それぞれ農家実習に入ります。前年度に卒業した先輩が体験談を語り、自分が選んだコースがいかによいか熱弁を奮います。我々後輩はそれを聞いて、進路を決めます。私は果樹コースを選び、同じ区内（泉区）の梨とぶどうの農家へ同僚三人と共に派遣され、一年間の実務を経験することになりました。

派遣先の果樹農家は、ぶどう園二反五畝（七百五十坪）藤稔・紅伊豆・巨峰・バツファローなど七本、梨園は六反五畝（約二千坪）幸水・豊水など六十本余の規模の果樹専業農家です。七十歳代になる園主のお父さんと四十代の息子さん二人で経営されていました。実習は四月末からだったので、すでに梨の受

粉作業は終わっていて、滴果作業から始まりました。これは一果叢（かそう）にビー玉ぐらいに成長した梨十～二十個のうち一番大きくて姿・形がきれいな玉一個だけ残して、他をはさみで切り落とす作業です。つまり一果叢一個にします。いつだったか野良着姿で帰ってきた私を見つけた近所の奥さんから「何しているの？」と尋ねられたので、「こんなことをしているんだよ」と話したら、その奥さんは真面目な顔をして「私が梨だったら、一番先に首切られているね」と云うので、びっくりして「いえいえ、そんなことはありません。最後まで残しておきますよ」と返事しました。その2へ続く

私の農業体験 その2

永井藤樹

平成20年8月26日

滴果作業は、一本の梨の木で千~千二百果叢ありますから、たっぷり三時間はかかります。しかし、翌年以降のことを考えて、樹勢を衰えさせないように最終滴果の段階で八百ぐらいに抑えます。梨棚は約一・八mの高さにあるので、両手を伸ばし、常に太陽に顔を曝して作業することになります。だから日焼けは勿論首や肩が痛くなります。でも爽やかな五月の風に吹かれ、小鳥のさえずりを聞きながら、時にはすぐそばでウグイスが鳴きます。雑念が入り込む余地なく、無念無想で時間の経過を忘れます。作業時間は、午前・午後とも三時間で、途中におよそ十五分の休憩が入ります。この時間が農家の方とお話しする貴重な時間で、私たちの園主はPTAの会長をされたり、議員の後援会長をなさった方だったので農業以外にも話題豊富、話上手で面白可笑しく、いつまで聞いていても飽きなく話つきなく、二十分、三十分が直に過ぎていきました。しかし、ある時これではいけないのではないか。農家は今猫の手も借りたいほど忙しい時だから、すぐにでも仕事に取り掛かってもらいたいはずである。しかし、実習中の身である私たちは無償だから、園主の方からは作業再開をなかなか言い出しにくいのではないかと気付きました。そう気付いてからは十五分を過ぎる前に、私たちの方から再開を切り出すようにしました。これが良い印象を与えたのだと思います。実習最後の日に園主から、「来年からはアルバイトで来て下さい」

と言われました。私たちの働きぶりを認めていただけたのだと感激しました。以来、毎年時期が来ると必ず声を掛けていただいています。年を重ねると私たちの技倆も少しずつ上達していきました。園主の指示は、毎年同じとは限りません。昨年と今年のやり方が違う場合がありますが、黙ってそれに従います。園主は昨年の成果を反省して、別の方法を試してみようと思っているのかもしれないからです。百軒の農家があれば、百通りのやり方があるといわれます。その農家へ行けばその家のやり方に従うことが大切です。そんなやり方よりこっちの方がいい、などと言うのはもっての外のことです。二年間の講座が終わると横浜市から「農体験リーダー」の修了書をいただいて卒業になります。これが私たちの信用を保証してくれるものになります。云ってみれば横浜市が身元引受人になってくれたのです。これで「どこの馬の骨」でもない身分になれる。

毎年五十人の修了生が年とともに増え大勢になると、よくしたもので誰からも立派だと認められる人物が出てきます。私の卒業した平成十四年三月にこういう人を中心に、環境創造局の指導もあって「横浜の農と緑を守る会」が結成されました。通称「はま農楽(はまのーら)」と言います。大消費地の横浜を控えた都市近郊農家ですが、年々高齢化と後継者不足が進み、農地が減ってきています。少しでもよいから手伝ってくれる人がいれば、

そのまま続けたいという農家が増えてきました。そういう農家の要請に応えるために、修了生による自主活動組織として会を立ち上げたのです。現在会員は二百名を超えています。仕事はいろいろな方面に及びます。野菜苗の根付け、育成管理、収穫、出荷調整、販売、畑やハウスの片づけ、草取り、水やり、施肥など有償、無償何でも引き受けます。その他ボランティア活動として里山公園の下草刈りや落葉かき、小学生のイモ掘り体験のためのサツマイモづくりなどもします。地産地消を念頭に味噌造り、トマトケチャップの作り方、草木染めの技術の公開なども進めています。定期的にしかも頻繁に「はま農楽通信」を通して情報を公開し、素早く農家の要請に応えるようにしています。私は近くのトマト農家の要請を知り、駆け付け「はま農楽通信」を見て来たことを告げると、即座に来週から来て欲しいということになりました。温室内での水耕栽培によるトマト工場です。ポイラーで暖をとり、二台のポンプで水と肥料を循環させ、マルハナバチを飛ばして受粉させます。少し上向き加減に斜め横に十m以上もの長さに伸びた茎に付いているトマトの下葉を六枚とか八枚とか指定された枚数切り取っていく作業です。片膝をつき葉を掻き分けながら、いざり歩きで作業を進めていきます。全身汗でずぶ濡れになり結構大変な仕事です。午前三時間だけの作業ですが、五百ミリリットルのペットボトル二本が空になります。去年は、観葉植物の生産農家で働きました。農仲間からの情報で、人手を欲しがっているというので応じたのです。これが大変な仕事でした。真夏の太陽の下で、尺鉢といって直径三十センチ深さ三十五センチのプラスチック鉢に土を入れるのですが、七キロぐらいの重さになります。これをトラックの荷台に積み込み、二段重ねにします。トラックで畑に運び、荷台から降ろして所定の位置に並べます。何

度も往復し、一種類の植物で多いものだと数千鉢になります。この作業より大変なのは、高さ三mぐらいの植物が植わっている鉢の場合、土は水分を含み優に十キロを超す重さになります。畑で成長させたこの植物九個を二輪車に乗せてトラックまで引っ張って行き積み込み、冬に備えて温室に入れ指定された位置に並べます。この仕事は私の体力の限界を超えていたので、一年で辞めました。一昨年農政事務所の指導と資金援助を得て、五百坪ほどのササやぶを開墾することになりました。近くに住む修了生十人で開拓団？を結成し、共同して野菜作りを始めましたが、スコップと鍬での開墾は遅々として進みません。いずれ地域に開放して、農体験の場として活用してもらおうことになっています。私自身はあまり沢山の農体験をしているわけではありませんが、どんな農作業も楽ではありません。でも私は定年後、農業を選んで本当によかったと思っています。 終わり。